

手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (VIII)

菊池 昭

17. 「第 XVII 章」について (承前)

さて、Horace がベッドに入って一時間もたってから Narcissa が兄の所へやって来る。そして明りもつけない暗やみの中でベッドのわきに突っ立つと、“cold unbending voice” で、町を出て行ってくれと Horace に迫る。兄であるあなたにこの町で勝手なことをされたのでは私の立場がない。ほかの土地でなら何をしようが知ったことではないから、女を連れてさっさとメンフィスへ行ってもらいたい、というのである (MS. 94, TS. 246; R. 178-79)。まことにエゴイスティックなことばを残して妹が寝室から出て行ったあと、オリジナル版のそれに続く部分は、Horace がカーテンの上に依然重く垂れこめる深い闇の中に身を浸したまま、この問題にかたがついたらヨーロッパへ行ってみようとする場面になっている。彼は “This damned country” と呟くのだが、続けて突然 Belle に離婚の手紙を書こうという気持になる。そして一度身を起こして床におり立ちかけ、しかし「いや、明日にしよう」——いまのような気持じゃ、とてもまともな手紙など書けそうにもないと思い直す、というようになって行く。

R. ではこの部分は落とされるのだが、しかし実はこの箇所は、MS. 94 でマージンにわざわざ追記されたものだった。R. で削られることになるとはいえ、この追記で Horace がなぜ唐突に離婚を考え、そしてなぜ改訂時にそれが再び姿を消してしまうのか、それを考えることは、ここでもう一度新旧二つの *Sanctuary* の性格の違いをたしかめさせることになるだろう。

旧版では、冒頭からこの第 XVII 章の前、つまり第 XVI 章まで

は、Narcissa という女について、たしかにその利己性俗物性が徐々に表面化されては来るものの、大体のところはまだ Horace が抱懐する理想の女性像に近いやさしさを持った女というように描かれている。所がこの第 XVII 章になって、Faulkner は Narcissa の本性をはっきりと読者の前にさらけ出してみせるのである。Horace の心情に即していえば、それは次のように述べられるものだろう。

Narcissa の邪悪さは、今や Horace にも疑いようのないものになった。思えば妻の所からとび出して来た時にも、彼は妹の imperviousness を心の拠り所にしていただ。自分が大きな間違いを犯していたことに気づく。妹はむしろ、あの “sanctified streets” でうわべを取りつくろいながら暮している、中味の汚れ果てた人間たちの典型ですらあったのである。それは Ruby に会って以来、彼にも徐々に感じられて来ていた疑いだったが、今や紛れもない事実として目の前に突きつけられてしまった、というわけである。

この夜が明けた次の朝、差し当って Horace が競い合わなければならぬ地方検事のことを訊ねる Narcissa に向って、彼は “Why do you ask that? I never knew you to ask an idle question before.” (MS. 94, TS. 246. イタリックスは筆者) という。イタリックス部分も R. では削られてしまうのだが、このことばにもまた、以前のお前なら兄のすることに要らぬ差し出口をしてしゃしゃり出るような女ではなかった筈、という Horace ののがい幻滅感があらわになっていよう。三十年間信じてきたものさえ実態がこうであるとすれば、Horace が Belle という女を Narcissa の代用物と考えていた、いないにかかわりなく、初めから “imperviousness,” “inviolation” などとは縁のなかった彼女に今更何を求められるのか、Belle によって何が満されるというのか。Horace の心に湧いた思いはこれだったに違いない。

こう考えて来れば、Horace が離婚の手紙を書こうと思いついたのは、少しも唐突ではなかったわけであり、更にまたここから、妹に代表される世間の大方の人間共の俗物根性へと思いが進めば、Horace の中にこの国から逃げ出したいという強い欲求が湧いて来ても不思議ではない。きれいごとの清教徒的倫

理を、他人ばかりか自分で自分の心を欺くために利用している者たちが巾をかかしている国、彼らのエゴイズムの悪臭に満ちみちた恥ずべき“sanctuary”。彼の口から“*This damned country*”という呟きが洩れ出るのも無理ないことと言わざるをえないのである。

オリジナル版では、この箇所での *Narcissa* の吐く台詞は、改訂版と同じものにみえて実はずっと重い意味を持つ。旧版での *Horace* が、妹との関係において初めて徹底した打撃を受けるのはまさにこの所においてなのだが、この打撃をきっかけにして彼は更に、自分を取り巻く人間たちの精神的不健全さへと思いを進めて行く。一方、*Narcissa* を初めから邪悪な女として登場させる改訂版では、同じ台詞を述べる *Narcissa* に対し、幻滅は幻滅としてあるにしても、しかしそれは、今更妻の精神的不潔さを連想させるまでもないものだったのである。

ところで、オリジナル版における *Narcissa* は、*Sartoris* 中の心やさしい *Narcissa* と改訂版 *Sanctuary* の邪悪な *Narcissa* の中間にあって、両者の橋渡しをするとでも言ったかたちで、白が次第に薄墨色に移りやがて真黒に変るようにその性格を移し変えて行くのであるが、オリジナル版における *Narcissa* のこうした性格造型は果して *Faulkner* が最初から意図していたものだったのだろうか。*Sartoris* を読んで *Sanctuary* へ来てみると、*Narcissa* という女の余りの変りように驚きを感じずるのだが、それだけに、オリジナル版において *Faulkner* はまず、*Horace* という主人公を脆弱とほとんど見分けがつかないほど純粹でしかも自省的、しかしそれだけに正義感の強い人物として設定し、その純粹さを無償の愛の極限とも言える incestuous な感情によって示し、一方 *Goodwin*, *Ruby* 救助の行動を通してその正義感を表出することにして、*Narcissa* は *Horace* のそうした性格に、表側からあるいは裏側から順次照明をあてて行くもの——言いかえれば、*Horace* に対するそうした役割に合わせ、筋の進行に従って *Narcissa* の性格はかたち作られて行ったのだとも考えることができるように思う。そしてその観点からすれ

ば、オリジナル *Sanctuary* という作品は、実は恐怖煽情小説どころか、社会悪告発すら二次的テーマにすぎぬ、Horace という理想主義的知識人の内面の記録、魂の葛藤の記録以外の何ものでもないと言えいいうものに違いないのである。

さて翌朝、Horace は鞆を下げて朝食にあらわれる。MS., TS. では、妹と一つ家に寝起きするのも嫌になったこの Horace が、「裁判も近づいて、これから忙しくなるから」と弁解しながら、ようやくここから生家に戻って一人暮らしを始めるということになっている（第 VI 章参照）。

朝食が終って Horace が去ったあと、Narcissa が Miss Jenny の所へ行って地方検事の名を聞き出すくんだり（R. 180）は、MS. にも TS. にもない R. での新作であるが、MS. 94, TS. 246 で Horace が深い幻滅感をもって味わった Narcissa の俗物根性、卑しさは、今度は Miss Jenny の辛辣な口を通して暴き出されることになる。

所でここで興味あることは、R. で Miss Jenny が “You’ve known him all your life.” と言って “Eustace Graham” と地方検事の名を述べる箇所は、MS. 94 で Horace と Narcissa の問答の一部として一度書かれながら抹消されたものと同形だということである。

これはオリジナル版から一年半後、この作品を書き直した際に、Faulkner はもう一度 MS. に戻ってそれを検討し直したということを示すのであろうか。もしそうだとすれば、このことは、Faulkner にとって改訂版 *Sanctuary* が決して場当りの仕事などではなく、真剣な労作であったことの一つの証左にもなるだろう。しかしまた、常識的に言ってもう一度 MS. にさかのぼったとまでは考えられないかもしれない。だがそうであるなら、一年半の空白のあとに全く同一の台詞が再び現われるというのはどういうことだろうか。おそらく、Faulkner にとってオリジナル *Sanctuary* とは、その片言隻句でさえ少々の時間的経過では意識下から消え去ることのない、まさに鏤骨の作品だった——今度はそういうふうにも考えることもできるように思う。いずれにせよ、

新旧どちらの *Sanctuary* も作家的良心によって書かれた最も上質の文学であったと断言して間違いない筈である。

MS., TS. のこのあと、つまり MS. 94の半ば、TS. 246下から二行目からの、Horace がRuby に新しい住ま居を見つけてやった話からあとは、そっくりそのまま R. 第22章として使われる。所で、この第 XVII 章の終結部、MS. 97, TS. 254にある次の一節は R. にはないものである。Snopes の下劣な品性をいやという程味わったあと、Horace はまたもや Little Belle の写真を眺め、更に Belle への離婚の手紙を書くのであるが、この一節を読んで、Horace が Snopes によって惹き起こされた不愉快さを、まるでいじめられた子供が母親に甘えかかるとでも言った具合に、愛する義理の娘の写真を眺めて紛わせようとしたとみるのは、そうした意見が多いとはいえ、やはり無理なように思われる。

When he [Snopes] had gone Horace entered the house and turned on the light, blinking after the subtle treachery of the moon. Little Bell's photograph sat on the mantel. He took it down, looking at it. The light hung on a shadeless cord, low; the shadow of his body lay upon the photograph. He moved it so that the light fell upon it, then drew it back into the shadow again. The difference was too intangible to discern, even by its own immediate comparison; the white still white, the black still black, the secret, musing expression unaltered. Delicate, evocative, strange, looking up out of the shadow with a crass brazenness, a crass belief that the beholder were blind. He set it back on the mantel and sat down and wrote the letter to Belle in Kentucky, offering a divorce. (MS. 97, TS. 254)

虚心に読めば、Horace がここで Little Belle の写真を、よろこびどころかある大きな不安をもって見つめていることは紛れようもない。Snopes

という男は、Horace から見ればまさにこの世の悪そのものである。所が、そういう手合いこそが世にはびこり、無垢の心を侵害し続けているのだ。Little Belle にも、そうした邪悪の影は間違いなく迫っているのだろう。あるいは、彼女は実はすでにその影に侵されていて、しかしそのことについては鉄面皮にもお人好しの義父の目をうまくたぶらかしている積りでいるのかもしれない。

だが、うわべを取りつくろってさえいれば、邪悪によって心が害われていようと、外から見抜かれることはないなどと信じるとしたら、それは愚の骨頂というものだ。evil に内部を侵され腐敗させられてしまった人間は、Snopes のように必ずその腐れぶりを外にさらけ出すものなのである。Belle もまた、そういう一人だった——この思いが、彼に再び離縁状を書かせる決意をさせた、と見るのが一番自然な読み方であろう。

所で、妹 Narcissa に限らずこの Little Belle に対する Horace の当初の感情が、仮に incestuous なもの——兄とか父とかいうことばが作っている枠を踏み出した、いわば「男」としての愛情であったとしても、そのことだけで Horace を「女にもたれかかる」ことに腐心する半端な男と判断することができないことを指摘しておきたい。おそらくこれは、なぜ Faulkner がこの作品中に incestuous なかたちの男女関係を持ち出したかの一つの解答にもなるはずである。

Horace にとって、愛だけがこの世の唯一の真実であった。それは間違いのない。しかもその愛は、Goodwin の女に見られるような献身的なもの——つまりは無償の愛を意味していたのである。まさにこの報いなく愛しつづけるということのために、Faulkner は Horace をして、妹なり義理の娘なりを愛させる、つまり外見上 incestuous な愛とみえるものを志向させ、かつ無私の愛に生きている Goodwin の女に激しく心をゆすぶられる男として描いたに違いない。

別言すれば、相手からのより大きな愛情をお返しとして求める愛、愛の強要、愛という名の商取引しかない現実の大方の女たちに対する、Horace というよ

りは筆者 Faulkner の深い幻滅感を根にして、それ故にこそ彼は、無私無償の愛に憧憬する主人公を創出し、その心情を incestuous な愛のかたちにして提出したのではないだろうか。

18. 「第 XVIII 章」について

この章は MS. 98, TS. 255 から始まり MS. 103, TS. 273 で終って、R. 第23章として使われる。

第 XI 章で触れたように、Temple は Goodwin たちの廃屋に泊った夜、レインコートを身にまとしてベッドに横たわるが、この章において、その夜のとんまつを Horace に語って聞かせる Temple 自身の口から、なぜそうしたかの理由が次の引用文のように説明される。なおここに出て来る “*cauteen*” は、別の論文で述べた通り、男性性器を象徴していると考えられる。¹⁾

“Then I thought about fastening myself up some way.

1) この部分については、拙論「*Sanctuary* における〈レインコート〉と〈水筒〉のイメージラリーについて」、『人文研究』(小樽商大, 1978), LVI 特に pp. 66-67を参照。

なお、Temple の回顧談のこれに続く部分で、R. 212 に “Dont she look sweet. Dont she look sweet.” ということが現われる。例のごとき “Dont” のアポストロフィー欠如は、TS. 268 からそのまま引き継がれたものであるが、しかし MS. 102 ではこれがちゃんと “Don't…… Don't……” と書かれているのである。Faulkner はゲラ刷りに “won't” などとされていると、わざわざ「wont にせよ」とダメを押すのが常であったし、この独特の書法はたしかに若い時からのもので、例えば1920年代初めに書かれた “Adolescence” の ts. などにもはっきり認められるものである。所が一方、1926年半ば頃書かれたと思われる “Carcassonne” の原稿では、二種類ある ts. が二つ共に “don't” と “dont” を混在させているし、上記 MS. 102 の事例なども考え会せると、Faulkner の “dont” “aint” 等は、タイピングの際手数を省くために誤解を生じない限りアポストロフィーを打たずに済ませたことから始まったのではないかという気がして来る。ただ長年そうしているうちに、Faulkner 自身がこれを自分の文章のいわばトレードマークのようなものと感じ出し、それに固執するようになったのであって、他の彼の造語のように特別な文体的意味を荷わされていたものではなかったように思われる。

There was a girl went abroad one summer that told me about a kind of iron belt in a museum a king or something used to lock the queen up in when he had to go away, and I thought if I just had that. That was why I got the raincoat and put it on. The canteen was hanging by it and I got it too and put it in the—

“Canteen?” Horace said. “Why did you do that?”

“I dont know why I took it. I was just scared to leave it there, I guess. . . .”

(MS. 101-2, TS. 266; R.210)

ところで、Temple から上記の告白を聞き終ったあと、Horace は Miss Riba の売春宿からまっすぐ駅に向い、真夜中の汽車で Jefferson の自分の家に戻ることになるのだが、Temple をこんな所に置くのは自分の本意ではないのだという、Miss Riba の尤もらしいことばを背に彼女の家を去り、それから駅へ向う——この場面転換の箇所、R. でいえば p. 213に、Faulkner は “Better for her if she were dead tonight.” で始まる Horace の内的独白を挿入している。ところが、この極めて悲観的な色合いの濃い Horace の感懐は、実は MS. 103であとから書き足されたものであった。

Faulkner がこの一節を追記した真意はもちろん知る由もないが、Miss Riba でさえ暗然とするような Temple のみじめな告白を耳にしたあとで、「Temple だけでなく、Popeye も Ruby も赤ん坊も Goodwin も、それに自分も加えてみんな死んでしまった方がいいのだ。それがたった一つの解決法だというのなら、吹出物みみたいな余計者は世界の脇腹から焼き取られてしまうことだ」というような意味内容の内的独白をおこなうことでの Horace が、自分の中の邪悪さ——つまり、義理の娘によこしまな恋情を抱いている己れを省みながら、そういう自分に愛想をつかして「こんな俺は死んだ方がいい」ということを示すために、Faulkner がこの一節をわざわざ追記したのだとはどうにも思えない。

ここはやはり、本能に振りまわされ、それに追いたてられて無惨に這いずり

まわる男女と、彼らのために何事もなしえないでいる自分の無力さに対する、Horace の絶望感を示すものとみるのが一番自然であろう。そしてもしそうだとすれば、後で述べる通りこのことは、これに続く部分の Horace の行動理解に重大な影響を与えるものになる筈である。

さて、真夜中に Jefferson に戻った Horace が、自分の家に入ったあと、Little Belle の写真を眺める R. 215-16のくだりは、MS. 103, TS. 271-73の記述に対応するものだが、この部分は MS. と TS. (およびその引き写しの R.) の間にかかなりの違いが見られ、しかもその変更の跡、とりわけ MS. のそれには考えねばならぬいくつかの問題があるように思われる。まず次の一節について両者の記述を比較してみよう。(×は判読不能の語。イタリックスは筆者)

[A]

MS. 103:

The voice of the night—insects, whatever it was — had followed him into the house; he knew suddenly that it was the sound of (×) the earth on its slowing axis approaching that moment when it must decide whether to turn on or to remain forever still, *the thick order of the honeysuckle the order and substance of death.*

TS. 271-72; R. 215:

The voice of the night—insects, whatever it was—had followed him into the house; he knew suddenly that it was the friction of the earth on its axis, approaching that moment when it must decide to turn on or to remain forever still: *a motionless ball in cooling space, across which a thick smell of honeysuckle writhed like cold smoke.*

「地球が回り続けるか、静止するかの時」とは、言い換えれば「人間が生き永らえうるか滅びるかの時」ということであろう。そして MS. と TS.

のイタリックス部を見比べながら考えると、すいかずらのにおいを死のにおい、更には死そのものと等価にしている MS. イタリックス部は、どうも Horace が *that moment* の到来の近いことを「知った」、その時の付帯状況を示すというよりは、地球が永遠に静止するその時に地球を包み込む状況を述べたものようである。

とするならば、TS. になって削られてしまった MS. 103の記述は、Faulkner が “*the thick order of honeysuckle*” を、「人間の滅び」に深くかかわらせていたことを示すであろう。

だが、「人間の滅び」とは言ったものの、それは果して単純に生命の死滅を意味するものなのかどうなのか。すいかずらのにおいが何を表象しているのかということもからむこの問題は、更にこれに続く部分の綿密な検討を必要とするようである。まず MS. と TS. とではかなり様変わりしている上、R. になって完全に落とされた次の一節を眺めておきたい。

[B]

MS. 103

He found the light and turned it on and looked around the room. He was thinking Now I must go to sleep again so I can get up so I can go to sleep so I can get up again. Belle's letter lay on the mantel, and he thought, Even that doesn't matter. He went and took it up and looked at the superscription, at the small, scrawled marks which held a name, a word that no longer moved him, scrawled by a hand that had no actual relation to, (×) for, his life—that thing which had puzzled and pelted and crucified him for 43 years. Then he was looking at the photograph, holding it in his hands.

TS. 272:

He found the light and turned it on. Belle's letter was propped on the mantel. He took it up and

looked at the superscription, at the small disfigurements which held a name, a juxtaposition of letters which did not move him at all, scrawled there by a hand that had no actual relation to his life, feeling the hard ball of coffee inside him.

Then he was looking at the photograph, holding it in his hands.

これに続く、Horace が Little Belle の写真を手にとって思いに沈むという次の一節にも一か所、大きな変更が見られる。

[C]

MS. 103:

... in a shallow bath of highlight from the lamp.
The slow, faint curtains in the dark window, pulsing into the room in sluggish surges, wafted across the face the heavy scent of ^{honeysuckle} ~~jasmine~~ from the darkness beyond. Rich, almost palpable enough to be seen, the scent filled the room and the small face seemed to swoon in a voluptuous languor, ...

TS. 272; R. 215-16:

the face appeared to breathe in his palms in a shallow bath of highlight, beneath the slow, smokelike tongues of invisible honeysuckle. Almost palpable enough to be seen, the scent filled the room and the small face seemed to swoon in a voluptuous languor, ...

MS. に出て来る “honeysuckle” が最初は “jasmine” であったということとは、Faulkner にとって “honeysuckle” が必ずしも特殊な意味を荷わされているものではなかったのかもしれないとも考えさせる。

だが、書き直された TS. が、MS. より更に官能的な雰囲気を漂わせているのはたしかだし、そうであれば、書き直したということ自体が、むしろ

る“honeysuckle”の持つ意味の重さを示すものといえそうである。すなわち“honeysuckle”は Faulkner において、性的欲望を表象するもの、少なくともそれに深くかかわるものとして使われていたと考えることができるように思う。

とすれば、問題は上記引用文中に表出されている官能性である。この性的な雰囲気を持つ記述は、Horace が自分と義理の娘との肉体的つながりを夢想したことを暗示しているのだろうか。どうもそうとは思えない。

彼がここで Little Belle をただの無垢の娘として眺めていないことは間違いない。すでに第 II 章において、行きずりに知り合った男を家へ連れ込んだりしたと述べられている娘である。無垢どころか、ここではむしろ限りなく男を誘い、みずからもそれに酔い痴れる肉欲を身内に蔵した一個の女として彼は Little Belle を眺めていると考えてよいだろう。

今は無垢（と思われる）この少女も、やがては間違いなく汚れを身につける。Horace はそう思って Little Belle の写真を眺めているのであって、すいかずらのおいはたしかに性的なものにかかっているが、しかし上掲 [C] の MS., TS. においてそれが表象するものは、単なる Little Belle に対する Horace の欲情などではなく、よくも悪くも人間を身内から駆りたてる本然の欲求、広く人間に内在する性の欲望であることを、以下に順を追って説明して行きたい。

さてもう一度振り返ってみると、前掲 [A] の MS. では“honeysuckle”は“death”と密接にかかわり合っていた。そして [C] において“honeysuckle”は性的欲望を暗示するものとなれば、三段論法的に Faulkner において、性ないしその充足とは一つの「死」であったということになる。²⁾

2) ここで我々は、例えば Faulkner が *The Sound and the Fury* において、Quentin から男遊びをなじられ、「お前はあの連中を愛していたのか」と問いつめられた Caddy に、「あの人たちに触われたとき、私は死んだのよ」といわせていることもまた合せ思い出しただろう。そして honeysuckle のにおいは、この場面でも絶えず濃密にたちこめていたのである。なお、このことについては、拙論「Faulkner 文学における愛と死の意味」(II), 『人文研究』(小樽商科大学, 1973) ILVI, p. 40 を参照されたい。

性の充足は、ある意味において日常的時間の中断、[A] の MS. ふうにいえば、平常的な地球自転の一瞬の停止（の感覚）という意味で「死」のごときのものであるともいえよう。しかし仮にそれが一つの死であるとしても、それならば一層この性愛によってもたらされた死は、新しく生れ出るための死——再生のための死であるべきではないのか。[B] の MS. の表現をかりれば、「起きるために眠る」——そうした意味での死でなければなるまい。そして、そうした「生のための死」ともいうべき性は、お互いの無私的愛、相手に対するお互いの献身を土台としてのみ与えられるだろう。肉欲だけの交わり、性のための性は文字通りの死でしかない。Faulkner の愛と性についての考え方はそういうものではなかったろうか。そこから Horace の、自分が四十三年間感い追いかけ苦しんで来たものと、Belle という肉の塊にすぎぬ女は何のかかわりもなかった、ということば（[B] MS.）が出て来たと考えることは可能なはずである。

節度なく肉の欲望に身を委ねるなら、人間は死滅する以外にない——Faulkner はまた、前掲 [A] の MS., TS. 中のことば「地球の永遠の静止」に、そうした意味もこめていたように考えられるのだが、もし Faulkner によって観念された性が、上記のように「生のための死」であったとするならば、ただの性のための性、愛と少しもかかわりのない性——彼の周囲に、というよりもアメリカの社会全体に充満していると彼には見えたとに違いないそれ——は、彼にとっては胃の中の固いボール（[B] TS.）、吐き出さずにはおれぬ異質物であったろう。[C] に見られる記述に続く部分は、Little Belle の写真を見ていた Horace が突然吐き気を催して便所にとび込み、そして Temple が凌辱される場面を思い浮かべるというくだりである。様々な論議をよんだこの場面の真意は一体何であろうか。³⁾

Little Belle にすでにほの見える汚れ、退廃のきざしは、Horace に、

3) 例えば Langford, pp. 19-20 参照。この箇所でも Langford も引用している Cleanth Brooks の見解の方が、むしろ作品そのものの熟読に基づく健全な判断を示しているのではなかろうか。

Temple という同じように身内に退廃の根を蔵していた少女を思い出させ、更に肉欲だけの交わりということがこの世で最も非道なかたちで現われた事件を思い出させるのである。人間においてそうした姿で現われた肉欲に対する怒りと、更にはまた、Little Belle もまた Temple のようなかたちで汚されないという保証は何もないのだという怖れとは、二つながら彼の胃の中で凝り固まり、もはや嘔吐するよりほかに我慢のできない丸い物体になって行った——Faulkner の語るのは、まさにこのことなのだと言いたい。

前掲 MS. 101-2, TS. 266 での Horace が、もし娘に恋慕していることで自己嫌悪を催し、ついにはそんな自分は死んだ方がまだとまで思ったのだと解釈し、しかも娘の写真を眺めているうちにまたもや肉欲むらむらと湧き起こり、しかし忽ち己れのそうした邪悪さに恥入って、再び自己嫌悪にさいなまれながら嘔吐するに至ったのだとしようか。だが果して、いやしくも筆一本で彼独自の堅固な小宇宙を構築することを目指す作家が、そういう足元の定まらないめろめろの人間を主人公にしてその目的を達しうると考えるものかどうか、大きな疑問を感じないわけには行かない。

19. 「第 XIX 章」について

MS. 104-111, TS. 274-92 に書かれた章で、改訂版の第24章に該当する。

MS. 104 の左肩に、一度 63, 62, 60 等のページ・ナンバーが書き込まれてから消されており、一方、十数枚さかのぼった MS. 91 の左肩には 62, 61, 59 の番号が同じく書き込まれたあとに消されているので、最初 Faulkner はこの両者を連続させる心積りであったことがうかがわれる。

MS. 91 で終る章というのは、Virgil Snopes と Fonzo の Memphis における宿探しのことを述べた第 XVI 章だから、作者は初めのうち、この第 XIX 章に描かれている Memphis での Temple のすさまじい墮落ぶりをすっかり述べたあとに、(前章、つまり第 XVIII 章で語られているところの) Horace が Temple のところへ赴いてその告白を聞くという話を持って来ることを何度か考えたと言えそうである。しかしそういうかた

ちにすると山場が先に出てしまう感じになって、小説的興趣という点からいえば、やはり MS. で最終的に決定した配列の方がまさっているといえそうである。

さて、R. の pp. 225-26 になると、Popeye が Temple を車に乗せて、何やらいかがわしげな所へ連れて行く。インポテンツの彼が Red という男に自分の代りをさせるためののだが、それと知った Temple が車の中で泣き声をあげ、Popeye に口を手でふさがれたりしたあと、「あんたは Red のようにしたくはないのか。わたしたちのすることを見ているのが自分ではなくて、Red だったらと思わないのか」と口汚く罵る、というようなことを述べる箇所がある。これは TS. 283 のままなのだが、MS. 107-8 のこれに相応する部分を眺めるとかなりの違いが見出される。

まず“Red”という名が出て来ない。MS. には、一度書かれてから線を引いて消したかなり長い文章もあるのだが、それを判読してみると、Temple が、そうした不自然な性的関係を持ちたくないという意味のことは繰り返して口にし、しかし Popeye の方は聞く耳持たぬという態度で冷然と聞き流しているということになっている。

しかしそれを消してしまい、そのあと主として Temple の連れて来られたいかがわしげな場所のことだけを述べるように変えているのであるが、更に TS. ではそれさえも一層簡潔なものにされるので、周囲が淡彩になった当然の結果として、TS. では、いまやすっかりあばずれ女になってしまった Temple の姿だけが、強く浮き出て来ることになる。

この部分にすぐ続けて、Popeye に口をふさがれた時の爪のあとがないかと鏡をのぞく Temple の、MS. 108, TS. 283 (R. 226) に出て来る次のような叙述は、彼女の墮落ぶりのすさまじさを駄目押しの示す描写といふべきだが、これは、MS. 108 で、マージンにわざわざあとから書き込まれたものなのである。無私とか無償とかいうことに全く縁のない肉欲そのものへの耽溺は、人をここまで狂わせる——Faulkner はそう言いたかったに違いない。

“Shucks,” she said, “it didn’t leave a mark, even”; drawing the flesh this way and that. “Little runt,” she said, peering at her reflection. She added a phrase, glibly obscene, with a detached parrotlike effect.

(MS. 108, TS. 283; R. 226)

ついでに言えば、次の文は MS. 108 および MS. 111 には見当たらないので、それぞれ TS. 284 と TS. 291 で新しく作り出されたということになるが、ダンス場の淫猥な雰囲気刺激されるまま欲情にのたうち出す Temple を暗示するようなこういう描写が、改訂の際に棄てられることなくそのまま使われていることに注意したい。

Behind her the music beat, sultry, evocative; filled with movement of feet, the voluptuous hysteria of muscles warming the scent of flesh, of the blood.

(TS. 284; R. 227)

she in a voluptuous swoon, unaware that they were moving, straining at him [Red] as though she were trying to touch him with all of her body-surface at once.

(TS. 291; R. 233)

Sanctuary について、Faulkner が当初目指したのは出来るだけそれを sensational なものにすることだったとか、しかし後になってまさにその点を反省して書き改めることにしたとかいうように受けとめるならば、上記のような叙述なども、R. では省かれてしかるべきだった筈である。一体、これが削られなかったのはなぜなのだろうか。魂の汚れ、evil に侵された人間の退廃、を描きつくす——これこそが、新旧の別なく Faulkner が *Sanctuary* という作品で一貫して追求した問題だったということを、それは示しているであろう。

仮に Faulkner が一度ならず二度三度書き直しを試みたとしても、Temple のすさまじい荒廃ぶりを示すこの種の描写を、彼は決して削りはしなかったに違いないのである。

なお次の文も、該当する MS. 109 にはなくて TS. 287 に初めて現われるものである。ここに出て来る「平たいピストル」は、前後の文脈から言って生殖能力を欠いた Popeye の性器の Freud 的シンボルであるように考えられる。それについてはすでに他の場所で述べたことであるが、⁴⁾もしその考察が正しいとすれば、前出の二文と同じに TS. で新たに作られ R. にそのまま利用されたこの箇所もまた、欲情に狂って不能者のからだをさえ求めようとする Temple の浅間しさを、紛うかたなく描出したものといえるだろう。

her hand stole toward his armpit, touching the butt of the flat pistol. It lay rigid in the light, dead vise of his arm and side. "Give it to me," she whispered. "Daddy. Daddy."
(TS. 287; R. 229)

ともあれ、この第 XIX 章の MS., とりわけその p. 104以降は、叙述がしばしば、枝葉末節にこだわるという感じを受けるほど綿密にすぎるのだが、TS. では文字通りに余分な枝や葉を取り払い、しかもその代りとして、より効果的な語句を新たに挿入しつつ、情欲に打ちのめされる Temple の姿

4) 「*Sanctuary* における〈レインコート〉と〈水筒〉のイメージリーについて」、pp. 66-67. なお参考のために、“Elmer”のタイプ原稿中、Faulkner 自身によって Book 1, CHAPTER FOUR, pp. 44-45 として示されている部分に見出される；次の一文を掲げておきたい。

Cigar stubs as symbols went the way of all symbols of illusion. There were other things he liked also: long tapering whips fixed pliant and slenderly recovering in their sockets on the dashboards of buggies; and he would stand in a dull trance staring at a factory smokestack.

が更に明瞭に浮かび上るように描き出していると言えるであろう。

20. 「第 XX 章」について

MS. 112-14, TS. 293-300 の範囲に書かれ、R. 第25章の前半部として使われている。

R. 237 にある次の一文（イタリックス筆者）は、いうまでもなく楽曲名の「青きダニューブ」の“blue”と軽音楽・ブルースの pun であるが、しかし MS., TS. を見ると、こうしたただの思いつきめいたことも実はそれなりの苦心が払われて出て来たものであることを感じさせる。

“How about the Blue Danube?” the leader said.

“No, no; dont play no blues, I tell you,” the proprietor said. “There’s a dead man in that bier.”

“That’s not blues,” the leader said.

“What is it?” the second man said.

“A waltz. Strauss.”

(R. 237)

MS. 112 で、“The Blue Danube” は、最初書かれた判読不可能の楽曲名を消しその上に並べて書かれたものであるが、MS. の段階では、Faulkner はまだこの語呂合せ的取り違えのこっけい味を出す気になっていなかった——というよりも、それに気づいていなかったようである。つまり、問題のイタリックス部分は、TS. 295 になって初めて書き加えられたものなのだが、音楽には余り関心を持とうとしなかったともいわれる Faulkner が、⁵⁾ 作品のために必要とあれば、ためらわずに楽器や楽曲にかかわる場面を（しばしばアイロニーや上記のようなユーモアを混じえつつ）筆にし、結構効果的に音楽的雰囲気を描き出しているのは興味深い。作家魂というものであろうか。例えば、*Sartoris* の第3章、Harry と別れる前の Belle が Horace と密会す

5) See Meta Carpenter Wilde and Orin Borsten, *A Loving Gentleman* (New York: Simon and Schuster, 1976), p. 140.

る場面で、罪のにおいのする情欲を、みずからロマンチックなものに思いなおそうとして弾くピアノについて、“Saccharine melodies she played, from memory and in the current mode, that you might hear on any vaudeville stage, and with a shallow skill, a feeling for their oversweet nuances.”と書いていることも思い出せるだろう⁶⁾。

ところで現在 R. の p. 239, ll. 15-17に見られる，“and fell again to dumping raw liquor into the bowl, splashing it into and upon the extended hands and cups.”という文中の“splash”は、当然“splash”のことであろうが、*Webster's New International Dictionary* に“Chiefly dial.”と説明されるこの“splash”という綴りは、MS. に始まって以後タイピングの際も、書き直しをした時にも、変わらず続いたものである。

次章でも同種の問題を取り扱うことになるのだが、この“splash”に関する限り、誤植でないことは明らかで、それなら Faulkner が文体効果を狙ってわざと方言を用いたのかとなると、どうもそういうことは言えそうにない。作品中のこの箇所、突然一語だけ方言を使わねばならぬ何の必然性もないからである。

とすれば、考えられることは唯一つ、Faulkner が常々 splash の語を〔splæʃ〕よりは〔splaf〕、ないしは〔splɔʃ〕のように発音し、しかも、というよりは従って、そのスペリングは“splash”であると信じ込んでいたということだが、もしそうだとすればそこから Faulkner の日頃の話し振りなども想像されて来、作家というような袂を脱いだ、朴訥な一市井人としての Faulkner の素顔がふと覗けて見えるような気さえするのである。

21. 「第 XXI 章」について

MS. 115-18, TS. 301-12の範囲にあり、前章に引きつづき（一行の空欄を設け）R. 第25章の後半として使われる。

6) *Sartoris* (London: Chatto & Windus, 1964), p. 143. これは *Flags in*

R. 245に次のような文がある。

Minnie came and filled the tankards again. "Reely,
I'm right ashamed," Miss Myrtle said. (R. 245)

もし MS. なしに文中の "Reely" を見るなら、これは一体誤植なのか、作家による方言模写的書き方なのか見当がつかない。まさしく、Meriwether が Temple の発する "gu-govener" と、Goodwin のいう "I aint going say……" の to なし "say" について、同様の疑問 (Temple の場合は方言というより、彼女の精神の緊張ぶりを示したのかとも考えているが) を抱いた通りなのである。⁷⁾

こういう時、もし MS. にそうした疑問に答える何かはっきりした証しが見つかるなら一番よいわけで、MS. 116のこの箇所を調べると、"~~Real~~ Reely, I'm right ashamed" と書かれているのを見る。Faulkner が、"really" ではなく "reely" が正しい綴りと思い込んで慌てて書き直したとは考えられないから、これはやはり Miss Myrtle の訛りを表示したものと考えなければならぬ。

同様のことは R. の p. 249にも現われる。ここでは Miss Reba のことばとして "There was a Chineese robe……" と書かれているのだが、これは TS. 308以後のことで MS. 117ではちゃんと "Chinese" と書かれており、明らかに作者が発話者の訛り (あるいは、人種蔑視意識か) を示そうとして書き直したものと知れるのである。(未 完)

the Dust 第3章第3節からそのまま引き継いだ叙述でもある。See *Flags in the Dust* (New York: Random House, 1973), p. 180.

7) James B. Meriwether, "Some Notes on the Text of Faulkner's *Sanctuary*," *The Papers of the Bibliographical Society of America* (New York: The Bibliographical Society of America, 1961), V, 202.